# 願わくばこの夢の先を

霧藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願わくばこの夢の先を

【Ｎコード】
Ｎ９０７６Ｇ

【作者名】
霧藤

【あらすじ】
中学二年生の”私”の堕落し、閉じこもるだけの日々を描いた物語。

中学二年の夏。
何もかもが嫌になった。
それまで特別何かが好き、というわけでもなかったけれど憧れていた先輩がいたから面倒な毎日でも学校までせっせと足を運んだ。
でも、部活に行ってもその先輩にはもう会えない。
綺麗なフォームで打たれたサーブもスマッシュもボレーも・・・・・
もう、見えない。
その瞬間に気づいたんだ。
「嗚呼、私は何をやってもダメなんだ」ってね。
勉強だってやる気は0。
来年受験が控えているのに言うセリフじゃないけれど、受験なんてクソくらえ。
私は私の楽しい毎日を送りたい。
そんなことを考えていた。
そしてその結果、部活にはあまり出ないし学校も休みがちになった。
毎日同級生から浴びせられる「また遅刻かよ」「今度は早退？」「ちゃんと部活でろよ。」
「つかもう学校くんなよ」「なんでいつも二時間目になるとくんの？」
いやな悪口の数々。
しかしそれらはすべて本当のことだから言い返すことなんて出来ない。
我慢、我慢、我慢・・・・それだけが頭にあった。
学校の教師たちは皆、「相談があったらいつでも言ってね。先生があなたの相談に乗るから。」
と心配なんだか興味本位なんだか分からないような言い方をした。
だからいざ相談してみれば

「それはお前が悪い。」「なんで？もっと詳しく聞かせて。」「先生も昔は・・・・・・」
というように私を否定するか、興味があるだけか、自分の昔話を始めるやつらばかりだった。そんな毎日が窮屈だった。
きることが少なくなった冬服。
エナメルの匂いがしっかりと染み付いている。
かといって臭いわけではなく制服独特のにおい。
そんな制服はいつしかハンガーにかけられたまま放置されるようになった。
私は毎日自分の部屋でその制服をみて、溜息をひとつこぼすだけだった。
情けない、そう思うしかなかった。
先輩に「気持ちを入れ替えて頑張れ。応援してるよ」とメールで言われたときにはあれほどに頑張ろうと思ったのに、
今では常に自堕落の日々。
先輩に合わせる顔もなかった。

やはり、世の中とは不公平に出来ているのだ。
そう思った。
何度左手首にカッターの刃を走らせようと思ったことか。
しかしすべて未遂。
怖くて未練がましく途中でやめた。
自分の傷がない手首に鮮血が走り肉が裂け、皮が破れるその様が異様に怖かった。
他のクラスメイトたちは毎日私の悪口を言いあざ笑うのみなのに、
私はどうしてこんなにも苦しまなければならないのだろう。
そう思った。
私はそのときは自分が間違っている、なんて事には気づきもしなか

った。
ただ、ただ自分が可哀想、私はこんなにも傷ついている！
と主張したかっただけなのだ。
今考えればバカらしい。
同級生と仲良く出来ないのも自分が意地っ張りなせい。
それすらもすべてを人のせいにした。
気に入らないことがあると壁や木を殴った、蹴った。
そんな私を見ていた人はどれほどに嫌な気持ちになっただろう？
私はガキだった。
何も分からずに前に突っ走るだけの単純バカだった。
何も考えずにひたすらに突っ込むだけのただの大バカ野郎でしかなかった。
そんな自分を見て、誰が同情するだろう？
同情して私は一体どんな言葉をかけて欲しかったのだろう？
恐らく、「大丈夫？」と心配して欲しかったのだ、色々な人に。
もっと私を見てほしかったのだ。
もっと私を構って欲しかったのだ。
私はワガママで貪欲、ガキで大バカ野郎だった。
それは、今も変わらないのかもしれない。
たくさんの人に迷惑をかけ、満足している自分がそこにいるのかもしれない。
これは、一生変わらないのかもしれない。
私の中には悪魔が住んでいて・・・・・などという可愛らしいものではいないのだ。
恐らく私自身が悪魔であり、自らも知らぬうちに悪魔にすべてを奪い取られ、望むのはただひたすらに自分が満足するような出来事。
嗚呼、いつ頃かまだ私が人間だった頃に視た夢が懐かしく、愛おしく思える。

幸せだったあの頃。
今とは違い荒(すさ)んだ目をしておらず、濁った目も見せずに、キラキラと輝いていた夢のような時間を過ごしたあの頃に、私は戻りたい。
本当はこれは長い夢で私はまだキラキラしたあの時間の中にいる。
今だけは、少しだけはそう思わせて欲しい。
せめて私が”人間として”生きていたという事実だけはこの時間の中に留めておきたい。
嗚呼、願わくばこの夢の先を私に・・・・・・。
そしてその夢を今すぐ崩壊して欲しい。

**（後書き）**

この物語は実話が元になっております。
去年の私の色々な人に迷惑をかけた恥とバカさとガキっぽさ・・・・・・。
先生にも友達にも先輩にも、もちろん家族にもたくさん迷惑をかけました。
そんな時代を生きた私の物語でした。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9076g/

願わくばこの夢の先を

2010年12月26日02時24分発行